

むしろ、インタビューを重ねるうえでより重要に思われてきたのは、ライフストーリーの「記録」の側面よりも「ストーリー」(語り)としての側面である。それはしばしばライフヒストリーと区別されてライフストーリーと呼ばれることもあるが、この概念の重要な点は、ライフストーリーを単に語り手の語りとするのではなく、語り手と聞き手(インタビュアー)との「共同制作」と捉える点である。その時、聞き手は、インタビュアーという相互行為を通して語り手による「物語世界」の構築に主体的に関与する存在となる。桜井厚もいうように、一つのストーリーとして語られる過去の経験は「あのとき・あそこ」の物語(物語世界)であるが、語りは「いま・ここ」で聞き手との相互行為(物語行為)の結果として成立するものである。このような見方を桜井は「対話的構築主義アプローチ」と名付けているが、このアプローチに従えば、「語る」という行為は、単に過去の出来事や経験が何であったかを述べるだけでなく、その「語り」に共に参画することを通して、「いま・ここ」を語り手とインタビュアーの双方の「主体」が生きることとなるのである。

ホームレスの支援活動している宗教者たちは、彼らに寄り添いながら支援しているが、単に寄り添っているだけではない。彼らの声にならない叫びに耳を傾け、それに〈声〉を与える(あるいは少なくとも声を発するきっかけを提供する)。彼らに寄り添いながら体験を語らせ、それを共有する。語るという行為を通じて人々は、自己(アイデンティティ)を再び獲得し、自尊心を取り戻し、生きる希望を見出す。別の言い方をすれば、

支援活動に従事する宗教者たちは、その活動を通じて、ホームレスたちの声なき声を語っているともいえよう。インタビュアーである私たち研究者は、その〈声〉に耳を傾ける責任がある。同時に、「無縁社会」における宗教のソーシャル・キャピタルとしての可能性を探求するという点では、実は実践者たちと同じ目的意識を共有している我々としても、研究者としての在りようを常にリフレクシブ(再帰的/反省的)に問い返ししながら、宗教の社会活動にいかなる形で「貢献」できるか、と自問する視座を持ち続けるべきではなからうか。

ポルピュリオス『ニウンペーの洞窟』における神話解釈

小野 隆一

本発表の目的は、新プラトン主義思想家ポルピュリオスが、その著作『ニウンペーの洞窟』においていかなる神話解釈を行っているか明らかにすることである。

この『ニウンペーの洞窟』は、ホメロス作の叙事詩『オデュッセイア』において語られているニウンペー(山川草木に宿る、美しい女性の姿をした妖精のこと)に捧げられた聖域である洞窟の謎めいた描写のひとつとつを、著者ポルピュリオスが解釈していくという作品である。

本発表では、『ニウンペーの洞窟』の内容を概観することを通じて、ポルピュリオスの神話解釈がいかなるものであったかを明らかにすることを試みたい。

まず、ポルピュリオスは、洞窟そのものの意味するところを解明しようとする。彼は、洞窟も世界も自ずから生じたもので

あるという点から、洞窟は世界の象徴であると考えた。また、洞窟を取り囲む岩や石の堅固さは、形相に規定された質料に通じるため、洞窟は質料に密接に関係するものであるとも彼は考える。

次に、彼は水を司るニュンペーのナーイアスは、魂の象徴であるとした。なぜなら水は生命に欠かすことのできないものであるからである。

さらに彼は、洞窟内に置かれた様々な物品の示すことを明らかにしようとする。まず、石でできた混酒器や甕であるが、これは石の間から湧き出る水を表すと彼は考えた。次に石の機と海紫の布はそれぞれ骨と肉であるという。なぜなら石は骨に類似し、海紫の布は貝の分泌物で染められるからである。そして、蜂蜜については、神酒ネクタルと同一視されることから、魂を誕生へと向かわしめる快楽の象徴であるとした。

次に、北と南に向いた洞窟の二つの出入口であるが、ポルピュリオスはかに座とやぎ座にある天の門を通り魂が下降・上昇するという説により、これを説明した。かに座は北に、やぎ座は南にある星座であるからである。

最後に、洞窟のそばに生えたオリーブの樹については、世界を秩序にしたがい形成した神々の思慮の象徴であると彼は考えた。なぜなら、オリーブは洞窟のある入り江の先端、すなわち頭に位置するからであり、さらにオリーブは知恵の女神アテーナーの聖木だからである。

以上より、ポルピュリオスはニュンペーの洞窟を、世界、質料と形相、魂の上昇と下降といったものの象徴であると解釈し

ていたことが明らかとなった。また、彼は解釈を行う際に際して、プラトンのみならず、ピュタゴラス、エンペドクレス、ヘラクレイトスや、彼の同時代人であるヌメニオス、クロニオスなど、多数の哲学者の意見を取り入れ、さらにはゾロアスター教、ローマやエジプトの宗教、はては聖書までその典拠とし、地理学、博物学、語源学、天文学などあらゆる学問の知識を動員している。このような神話解釈の形式は、ポルピュリオス以前には類を見ない、特筆に値するものである。

また、すべての解釈を終えた後で、最後にポルピュリオスは、ホメロスは何らかの真理を基にして、それをほのめかすためにこれらの描写を行ったのだと述べているが、ここに彼の神話解釈への態度が如実に表れている。

すなわち、ポルピュリオスは神話を、真実を語るための表現形式の一種であると考えていた。この著作には、神話を単なる作り話と考えたり、歴史的事実の隠喩と考える者がいたことも記されている。しかしポルピュリオスはそのようには考えなかった。彼は、神話を何らかの真理を象徴するものとして、哲学的に解釈するべきであると考えたのである。

プロクロスにおける「神に似ること」の問題

土井 裕人

プラトン『ティマイオス』における「神に似ること」については、西洋古代哲学の末期に位置する五世紀の新プラトン主義者プロクロスの『ティマイオス註解』でどのように言及・解釈されているかを検討することで、古代の宗教思想から中世など